

# 応答句の「そうです」の機能について

大 島 資 生

## 1. はじめに

日本語においてYes-No 質問文に対する応答に用いられる、形式の固定化した語句（以下「応答句」と呼ぶ）の一つとして「そうです」がある。

(1) a. あなたは大学生ですか。－そうです。

b. あなたは大学に通っていますか。－??そうです。

(1)のように Yes-No 質問文には「そうです」で答えられるもの(a.)と答えられないもの(b.)とがある。以下では、応答句「そうです」の機能と、「そうです」で答えられる質問文のいくつかのタイプについて検討する<sup><1></sup>。

## 2. 質問文のタイプと応答句「そうです」の機能

以下、応答句「そうです」で答えることのできる Yes-No 質問文がどんなものであるかを観察しながら「そうです」の機能について検討していく。

### 2.1. 「そうです」で答えられる質問文(1)－その典型－

#### 2.1.1. 「のだ」質問文

「そうです」で答えられる Yes-No 質問文の典型的なものとしては、まず「のだ」をもつもの（以下「のだ」質問文と呼ぶ）が挙げられる。

(2) a. きんのう太郎に会ったのですか？ －そうです。

b. きんのう太郎に会いましたか？ －??そうです。

「のだ」をもたない b. は「そうです」で答えると不自然になる。次も同様である。

(3) a. おじいさんは子供を殴ったのですか？ －そうです。

b. おじいさんは子供を殴りましたか？ －??そうです。

(4) a. きんのうの試験は難しかったのですか？ －そうです。

b. きんのうの試験は難しかったですか？ －??そうです。

なお、「～のだろう」も「そうです」でうけることができる。

(5) きみ、さては太郎に会ったんだろう。 －そうです。

「のだ／のです」については従来数多くの研究がある（田野村(1990)が参考になる）が、ここでは益岡(1991)のアイデアを参考にする。益岡(1991)は「真偽判断が関わる文全般に関連する区別」として「存在判断型」と「叙述様式判断型」を区別することを提案している。「存在判断型」とは、「事態が存在するか否かの判断にかかわるもの」であり、

「叙述様式判断型」とは「事態の叙述様式が適切であるか否かの判断にかかわるもの」であるという(p. 66)。

(6) a. 選手達は泣いていない。

b. 選手達は泣いているのではない。(同書 p. 64)

a. は選手達が泣いているという事態が存在しないことを主張している(存在判断型)。それに対し b. は選手達が何かをしているという前提の下で、その事態の叙述として「泣いている」という表現が適切でないことを主張している(叙述様式判断型)。次のように質問文にした場合も同様である。

(7) a. 選手達は泣いていますか。(存在判断型)

b. 選手達は泣いているのですか。(叙述様式判断型)

益岡(1991)によれば「のだ」文は典型的な「叙述様式判断型」である。益岡(1991)のいう「叙述様式判断型」とは、簡単に言うと表現の適切性を問題にする文類型である。このことから、「のだ」の機能は、ごくおおまかには、(8)のように一般化できよう。

(8) 「Pノダ」の機能

「Pノダ」の機能はある命題表現「P」を別の命題(もしくは非言語的状況)に関連するものとして提示することである<sup>63)</sup>。

したがって、(7b)のように「のだ」文を質問文化すると、提示された命題表現が別の命題や状況に関連するものとして適切であるかどうかを問う質問文となる。

「そうです」を「のだ」をもつ文に対して用いることができることから、「そうです」の働きは「のだ」の「表現を提示する」機能に対応していると考えられる。そこで「のだ」の機能に対応する形で応答句「そうです」の機能をまとめると次のようになる。

(9) 応答句「そうです」の機能

「のだ」によって提示された命題(形式の表現)が別の命題や状況に関連するものとしてふさわしいものであるということを表明する。

「そうです」が、「その通りです」「おっしゃる通りです」「おおせの通りです」「君の言う通りだ」などのようにパラフレーズできることも参照していただきたい。これらはいずれも“相手の表現した、その表現の通りである”という内容を表わしている。

なお、「のだ」に類似した要素として「わけだ」がある。「わけだ」をもつ質問文も「そうです」でうけられる場合がある。

(10) A: [道路の] イチバン ミギオ アルッテタワケ?

B: ソウ(1171701) (井出他(eds.)(1984))

この場合の「~ワケ?」は「~トイウコトデスカ?」に近く、やはり叙述様式判断型であり、「のだ」文と同様に命題表現を提示する機能をもつと考えられる。

ただし、「のだ」質問文であっても、「そうです」が不自然になる場合がある。

(11) [「あした私の家に来てもいいですよ」と言われて]

本当に行ってもいいのですか？ -??そうです。

これは次のような文と同じく、相手の意向を問う質問文である。

(12) 明日大学へいらっしゃいますか？-??そうです。

これらは、「Pと思っている(思う)かどうか」、すなわち相手の心中に“P”という思考内容が存在するかどうかを問う質問文である(「存在判断型」)。ある命題表現が相手の意向・評価を記述するものとして妥当か否かを問うものではない。それゆえ「そうです」が使えないのだと考えられる。

また、次の「のだ」質問文は相手の意向を問うものではないが、「そうです」で答えることができない。

(13) a. A 今度入った子、劇団に入ってて、毎日夜11時まで練習してるんだって。

B へえ。その子、仕事(は)ちゃんとやってるの？

A やってるよ。/??そうよ。

b. A ねえ、学校まじめに行ってる？

B そういうあんたは論文は書いてんの？

A 書いてるよ。/??そうだよ。 (土井(1994) p.47・"/以下は鳥居)

「Pのだ」は先行文脈や非言語的文脈と関連するものとして“P”を提示する形式である。非言語的文脈の中には推論によって構築された世界も含まれる。(13)の例では、話し手Bは自分の推論の帰結(a', b'の波線部)と関連させて「のだ」質問文を発している。したがって、質問文が関連づけられるべきことからは文脈の中に顕在していない。

(13) a'. 「その子」はAの同僚として働いている→まっとうに仕事をしているということになる→「ちゃんと仕事をしているのか」(ちゃんと仕事をしているということか)

b'. Aはひとのことを心配している→自分のことについては余裕があるということになる→「論文を書いているのか」(論文を書いているということか)

ところが、次のようになっていれば、「そうです」で答えることができる。

(14) a. A 今度入った子、劇団に入ってて、毎日夜11時まで練習してるのに、すごくきちんとしてるの。

B へえ。その子、仕事ちゃんとやってるの？

A そうよ。

b. A 俺、最近すごくまじめだよ。

B 論文書いているの？

A そうだよ。

このように、先立つ文脈に顕在していることと関連させている場合(「きちんとしてる」→「仕事をちゃんとやっているのか」/「すごくまじめだ」→「論文を書いているのか」)には「そうです」が使える。

「そうです」は質問文に示された命題が他の命題・状況と「関連するものとして」適切であることを表明する(9)。したがって、質問文に示されたことがらが何と関連づけられているのかがわかっていなければ、応答者は「そうです」を使うことができない。ところが(13)では質問者(B)が自分の導いた推論の帰結と関連させて「のだ」質問文を発しており、その時点で応答者(A)は質問者がどのような推論を行なったかわからない。つまり、その質問文がどんなことがらと関連づけられているのか応答者には不明である。それゆえ「そうです」では答えられないのである<sup>4)</sup>。他方、(14)では質問文と関連づけられることがらが文脈に顕在していて明白なため、「そうです」で答えることができる。

### 2.1.2. 名詞述語質問文

名詞述語をもつ質問文も一般に「そうです」でうけることができる。

- (15) a. 鈴木さんは学生ですか? - そうです。  
b. あなたはまだ結婚しないつもりですか? - そうです。  
c. あなたは学生運動に加わる気ですか? - そうです。

「～するつもり」「～する気」などかなり形式化の進んだものでも、「そうです」でうけることができる。名詞述語文「N1ハ…N2ダ」において、N1とN2の意味的關係には様々なものがある。たとえば、N2がN1に対して分類を示すもの(「さそりは虫よ」)、性質を述べるもの(「彼女は陽気な性質だ」)、状態を述べるもの(「おれはいい気持ちだ」)、同定するもの(「私は田中です」)などである(高橋(1984))。名詞述語文「N1ハ…N2ダ」構文の表わす意味的關係の基本は、「N1(およびそれに関係することがら)について述べるのに適切な名詞はN2である」としてN2を提示するということであると考えられる。先に述べた「のだ」文とパラレルな形で示すならば、次のようになるだろう。

#### (16) 名詞述語文の機能

「N1ハ…N2ダ」の基本的機能はある名詞表現(N2)を、別の名詞表現N1(およびそれに関係することがら)に関連するものとして提示することである。

このような機能をもつ名詞述語文「N1ハ…N2ダ」構文におけるN1とN2の間の関係の典型的なものは、次のようにN1をN2でパラフレーズする関係である。

- (17) きょういらっしやいましたお客さまは、いつか晩にいらっしやいました方でございますしょう?(高橋(1984))

名詞述語文の「表現提示」機能が端的に現われるのは、次のような比喩表現である。

- (18) a. 君はぼくの太陽だ。  
b. ナボナはお菓子のホームラン王です。

これらは「ある事物(N1)を仮に一つの名詞句で表現するならばN2となる」といった意味合いがある。このことから名詞述語文が基本的に「表現を提示する」機能をもつ文であることが裏づけられるだろう。

このように名詞述語文は名詞表現を提示する機能をもつ。他方、先にみた「のだ」文はある命題を提示する機能をもっている。つまり、どちらも「表現の提示」という機能を共通して持っているのである。このように「表現の提示」の機能をもつ形式を「表現提示形式」と呼ぶ。これら表現提示形式を質問文にしたものはいずれも、提示した表現が適切かどうかを問う働きをもつと考えられる。これらの質問文に対しては、「そうです」で答えることができる。そこで、応答句「そうです」の機能についての 2.1.1. の記述((9))は次のように一般化することができる。

(19) 応答句「そうです」の機能 (改訂版)

質問文に提示された表現が別の表現や状況に関連するものとしてふさわしいものであるということを表明する。

なお、名詞述語文であっても、「そうです」で答えにくい場合がある (大曾美恵子氏のご指摘による)。

(20) それ、面白い本ですか? -??そうです。

この文は二通りの解釈のしかたがある。

(21) ①当該の「本」について、「面白い本」という表現が適切か否かを問う

②当該の「本」についての相手の評価を問う

①の解釈では「そうです」が使えるが、②の解釈では使いにくい。

(22) a. この本はあんまり面白くない本だけど、それは面白い本ですか? -そうです。

b. どうですか? それ、面白い本ですか? -??そうです。

後者の解釈ではこの質問文は次の文と意味的に同値である。

(23) その本は面白いですか?

(23)のように相手の評価を問う質問文は先に見た相手の意向を問う文と同様、「Pと思っているか(評価しているか)」どうか、すなわち相手の心中に思考内容“P”が存在するか否かを問うものである。それゆえ「そうです」が使えないのである。(20)の質問文も、相手の評価を問う文としての解釈が可能のために、「そうです」で答えると不自然になるのであろう。

### 2.1.3. ダ型文

2.1.2. でみた名詞述語文をはじめとして、「～ダ」の形式をとる文(以下「ダ型文」と呼ぶ)には様々なものがある。いわゆる分裂文もその一つであり、分裂文を質問文化したのに対しても「そうです」を使って答えることができる。

(24) a. 太郎が殴ったのは花子ですか。-そうです。

b. 花子と出会ったのは去年のクリスマス・パーティーでですか。-そうです。

c. 太郎がラブレターを送ったのは花子にですか。-そうです。

d. あなたが翻訳を担当しているのはその本の第3章からですか。-そうです。

分裂文「XノハYダ」において、“Y”は不完全な文である“X”を補完する要素である。すなわち、名詞述語文の場合と同様に、「“X”について関連する要素を提示すると“Y”となる」ということを表わしており、表現としての“Y”を提示する働きをしていると考えられる。このように解釈すれば、ダ型文は上の名詞述語文の解釈（16）を次のように拡張することによって処理できる。

(25) ダ型文「Xハ…Yダ」の基本的機能

ダ型文「Xハ…Yダ」の基本的機能は、ある表現Yを、別の表現X（およびそれに関係することがら）に意味的に関連するものとして提示することである。

そこで、「Xハ…Y（デス）カ？」は、表現“Y”が“X”に関連するものとして適切かどうか—「提示」した表現が妥当か否か—を問う質問文となると考えられる。

いわゆる「うなぎ文」もダ型文の一種であるが、うなぎ文を質問文化したものも「そうです」で答えることができる。

(26) あなたもきつねそばですか？—そうです。

うなぎ文[XハYダ]は“X”に関わりのあるものを簡潔に言い表すならば“Y”のようになる、ということを表す。たとえば「私はきつねそばだ」という文では「何を注文するか」という点で「私」に関わりのあるものを言い表すならば「きつねそば」である、ということになる。こういったうなぎ文も、(25)で処理できると考えられる。

ところで、2.1.1.で検討した「のだ」も、「S（文）の+だ」と分析でき、ダ型文の一種と考えられる。したがって、上で表現提示形式としたものはすべてダ型文であるということになる。そして、ダ型文の「だ」が「表現を提示する」機能を担っており、その前にくる命題（「のだ」文の場合）や名詞句（+格助詞）を提示するのだと考えられる。なお、言語表現を提示する「Sのだ」やその他のダ型文そのものも言語表現であり、これらをさらに「のだ」などによって提示する場合も—ごく普通に—ある。

(27) a. A「私に聞いているの？」—B「いや、お前に聞いているんじゃないんだ」

（「Sのだ」+「のだ」 小金丸(1990) p. 77）

b. 彼は本当は宇宙人なんだ。（「Nだ」+「のだ」）

2.2. 「そうです」で答えられる質問文（2）—周辺的なもの—

2.2.1. 相手に確認を求める文

相手に確認を求める文（特に「ね」をもつ文）は—すべての場合について完全に ok とは言えないが—「そうです」でうけた場合の許容度が高くなるようだ。

(28) a. きみはきのうこのパソコンを使ってたね？ —?そうです。

cf. きみはきのうこのパソコンを使っていましたか？ —??そうです。

b. きょう彼女はここへ来たよね？ —?そうです。

cf. きょう彼女はここへ来ましたか？ —??そうです。

「確認」行為はあることがらを述べ、「その記述でよい」という認定を求めることである。このことは、(28)の質問文が次のようにパラフレーズできることからもうかがわれる。

- (29) a. きみはきのうこのパソコンを使ってた、そうだね？  
b. きんのう彼女はここへ来た、そうだよ？

これらは提示された表現が適切かどうかを質問している。そのために「そうです」がやや自然になるのだと考えられる。もちろん、「の」が入ると許容度がさらに上がる。

- (30) a. きみは、魚が嫌いなんだね？ - そうです。  
b. きんのう彼女はここへ来たんだね？ - そうです。

また、話の様子・状況から推察できる内容を確認する場合も「そうです」で答えられる。

- (31) a. きみ、さてはパーティーに行ったね？ - ? そうです。  
cf. きみはパーティーに行きましたか？ - ?? そうです。

b. (相手話・顔から魚はどう苦手いと察して)

じゃ、魚は嫌い。(↓) - そうです。 (‘↓’は下降イントネーションを表わす)

c. (魚が嫌いな魚を見て) 食欲がありませんか？ - ? そうです (‘~ないですか?’に近い)

cf. (医者が患者に) 食欲はありますか？ - ?? そうです

## 2.2.2. 卓立 (プロミネンス) をもつ質問文

同じ質問文でも卓立 (プロミネンス) の差で「そうです」が自然になる場合がある。

(32) (旅行から帰ってきた友人に贈っている。「花子」は友人が旅行に行った先で性乱している。) 「花子に会えた？」

a. ハナコニ アエタ？ (↑) - ?? ソーデス (卓立なし・‘↑’は上昇イントネーションを表わす)

b. [花子にはおそろ(会えないだろうと思っていたのに) (エッ、ソレジャ)

ハナコニ ~~アエタ~~？ (↑) - ? ソーデス (‘アエタ’に卓立)

c. (エッ、ソレジャ) [むこうには花子の他にも友人がいるが、他の友人ではなくて]

~~ハナコニ~~ アエタ？ (↑) - ? ソーデス (‘ハナコニ’に卓立)

a. は、特に卓立をもたない、したがって文の特定の要素に焦点をおく質問文ではなく、「花子に会えた」という命題の真偽を問う文である。b. は「花子」に対してどうしたかということに焦点をおいて尋ねる文である。また、c. は誰に「会えた」かということに焦点をおいて尋ねる文である。b., c. のように卓立をおくことにより、文の特定の要素に焦点をおく質問文として解釈できる場合、「そうです」で答えることがいくぶん自然になる。

ある要素に焦点のおかれる質問文は、一般に次のように形式化することができるだろう (質問文における質問の焦点の問題については、Takubo(1985)、外池(1988) 参照)。

(33) 前提： [Proposition ... X ...]

質問文： [Proposition1 ... A ...] カ？

ここで焦点“A”をもつ質問文の解釈は次のようになる。

(34) 「前提」の“X”に“A”を代入してできた Proposition1 が状況の記述 (表

現)として適切であるかどうかを問う。

つまり、“X”を埋めるものとして“A”でいいのかどうかを問う質問文なのである。たとえば、(32)の b. では、「Xに会えた」の“X”を埋めるものとして「花子」が適切であるかどうかを尋ねている。すなわち、表現の妥当性を問う質問文なのである。上では、純粹に質問文の焦点だけを問題にするため、あえて「のだ」の入らない例を使って考えたが、一般に文の特定の要素に焦点をおく質問文には「のだ」が使われることが多いようだ。たとえば次のような文で「ここ」に焦点をおいて質問したい場合、a. よりむしろ「のだ」をもつ b. を使う方が自然であろう（もちろん「ここ」に卓立をおいて発音すれば a. も使える。また、(32)b., c. も「～の?」の形の方が自然である）。

(35) a. 太郎はここに来ますか。

b. 太郎はここに来るんですか。

すなわち、質問文の特定の要素に焦点をおくためには「のだ」文にするなどして表現提示形式にするのが一般的なのである。さもなければ(32)のように、当該の要素に卓立をおくことなどが必要になる。焦点を明示するための卓立をもつこのような文は、表現提示形式に近づいていると考えられる。それゆえ、特定の要素に焦点をおかない質問文（(32)の a.）に比べて「そうです」による応答が自然になるのだと考えられる。

### 2.2.3. 「マルチプル・チョイス」式焦点をもつ質問文

久野(1983)では次のような質問文は「マルチプル・チョイス」式焦点をもつとしている。

(36) 君は今日車で来ましたか。

益岡(1991)によると「マルチプル・チョイス式焦点」とは、「焦点になり得る候補者が限定されているもの」(p. 69)である。上の文について言えば、問題の事態を叙述するものとしては、「(今日)歩いてきました/自転車で来ました/バスで来ました/車で来ました」といった候補者に限られる。このように(36)のタイプの質問文が成立するためには、文中のある要素と paradigmatic な関係にある要素の集合を容易に想定できることが条件なのである。そして、(36)は「これらの候補者の中で「(今日)車で来ました」という表現が適切な叙述であるか否かを問っている」(p. 69)。つまり叙述様式判断型の質問文であるという。さて、上のようなマルチプル・チョイス式焦点をもつ質問文に対しては「そうです」で答えることが一判定は微妙であるが一可能である。

(37) a. 君は今日車で来ましたか。 -?そうです。

cf. 太郎は今日来ましたか。 -??そうです。

b. きこの夕食は外でとりましたか。 -?そうです。

cf. 太郎はきこの夕食をとりましたか。 -??そうです。

c. 先週の月曜日は大学で仕事をしましたか。 -?そうです。

cf. 太郎は先週の月曜日仕事をしましたか。-??そうです。

これらは2.2.2.でみたような卓立をもつ質問文とは異なるが、特定の要素に焦点をおく質問文である点は共通する。そこでたとえばa.では、「君は今日Xで来た」の“X”に(いくつかの候補の中から選んだ)“車”を代入した「君は今日車で来た」が適切な表現であるかどうかを問うことになる。したがって、これらもまた「提示された表現」の妥当性を問う質問文であり、それゆえ「そうです」で答えることが可能なのである。

### 3. おわりに

以上応答句「そうです」の機能について検討し、「そうです」で答えられる質問文は「表現提示形式」であること、したがって、「そうです」は質問文に提示された表現が適切なものであることを表明するという機能をもつことを述べた。

最後に「はい」と「そうです」の両方が使える場合について、両者の違いをみておく。

(38) あなたは大学生ですか? -そうです。/はい。

直観的に「そうです」には「正解である」「あなたは正しい」といったニュアンスが感じられ、より強い肯定であるように思われる。これは、「そうです」が質問文の中で提示された表現が別のことがらや状況に関連するものとしてふさわしいものであるということを表明する機能をもつことによるのだと考えられる。また、先述の通り「そうです」が、「その通りです」「おっしゃる通りです」「おおせの通りです」「君の言うとおりで」などのようにパラフレーズできることもサポートとなるだろう。

#### <注>

\*本稿は、1991年11月30日に「日本語シンポジウム「言語理論と日本語教育の相互活性化」」(於 千駄ヶ谷・津田ホール)において口頭発表した内容に加筆したものである。席上、大曾美恵子氏をはじめたくさんの方々から質問やコメントをいただいた。記して感謝の意を表したい。

1 「そうです」と同様のふるまいを示す応答形式に「そうだ」「そう」などがあるが、ここでは「そうです」で代表させる。

「そうです」と対になる応答句として「違います」などがある。森山(1993)では、応答表現としての「違う」「そんなことはない」を取り上げて考察している。

1) A「これは難しい本ですか。」

B「いや、違います/そんなことはありません。」

森山(1993)では上の例について「この本」が「難しい本」にあたるという解釈をすれば「違う」が使われ」とし(p.168)、「違う」は先行文の主張における二つの項の不一致-典型的には主語と述語の二項の不一致-を表すものである」としている(p.169)。また、

次の例について「ここでは焦点の理由成分が否定されている」とし、上のような例とあわせて「「違う」は、焦点とそれ以外の部分（前提主題）の「不一致」ないし「非該当」関係を表すと言うべきであろう」としている(p. 169)。

2) A「彼が行かないから、君が行ったのか」

B「いや、違います。」（「彼が行かないから」ではない）

森山(1993)では「概念の不一致関係」の表明が「違う」の基本的な機能であるとしている。上の1)が表わすのは事物の分類であり、問題になるのは概念の上下関係である。他方、2)が表すのは森山(1993)の指摘するように焦点と前提主題の関係である。この二つは互いにレベルの異なる意味関係であり、ひとくくりには疑問がある。ただし、1)の質問文は名詞述語文、2)は「のだ」文で、いずれも「XハYダ」形式（つまり表現提示形式）である点が共通している。森山(1993)では「応答付加表現と述語の品詞との相関はあくまで表面的なもの」(p. 173)としているが、実は森山(1993)において展開されている議論も、質問文の形式上の共通性にもとづいたものである可能性があり、さらに検討を要すると思われる。

2 「はい」「ええ」などの応答辞ではじまる応答パタンの使用についても、「そうです」ではじまる応答と同様の制約がある。(cf. 大島(1990))

1) あした学校へ行きますか。 - はい、?そうです。

cf. あした学校へ行くのですか。 - はい、そうです。

2) あの人を知っていますか。 - はい、?そうです。

cf. あの人を知っているのですか。 - はい、そうです。

それゆえ、ここでは「そうです」ではじまる応答と「はい」などではじまる応答とを同列に扱うこととする。

3 小金丸(1990)は「のだ」を「ムードの「のだ」」と「スコープの「のだ」」に分類し、前者は「提出する命題と状況との結びつきを示すために用いられる」(p. 80)としている。

4 これまでみてきた例のうち、「そうです」が適切なものは、質問文に先立つ文脈が明示されていない場合も、解釈にあたって「のだ」質問文となんらかの関連性を有する文脈や状況が想定されており、そのために自然に感じられているものと考えられる。

／参考文献／

井出祥子・生田少子・川崎晶子・堀素子・芳賀日登美(eds.)(1984)

『主婦の一週間の談話資料』解説・本文編／索引編(科研費特定研究「言語の標準化」)

大島資生(1990)「K 8 の分析」 奥津他(1990) 第4章

奥津敬一郎・井上優・大島資生・黄麗華(1990)

「Yes-No疑問文に対する日本語学習者の応答－中国語・朝鮮語話者の場合／分析編－」

『研究報告(6) 日本語の普遍性と個別性に関する理論的及び実証的研究』

(科研費特別推進研究報告書)

久野暉(1983)『新日本文法研究』大修館書店

小金丸春美(1990)「ムードの「のだ」とスコープの「のだ」」

『日本語学』明治書院 vol. 9 No. 3

高橋太郎(1984)「名詞述語文における主語と述語の意味的な関係」

『日本語学』明治書院 vol. 3 No. 12

田野村忠温(1990)『現代日本語の文法 I - 「のだ」の意味と用法』 和泉書院

土井玄(1994)「質問と応答の情報構造」 東京大学修士論文

外池滋生(1988)「否定－動詞・名詞の形態論との関わり－」

『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究』9 情報処理振興事業協会

益岡隆志(1991)『モダリティの文法』くろしお出版

森山卓郎(1993)「否定の応答付加表現をめぐって」『日本語教育』81

Takubo, Yukinori (1985) "On the Scope of Negation and Question in Japanese"

Papers in Japanese Linguistics 10

(おおしまもとお・国立国語研究所)